

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1292200621		
法人名	SOMPOケア株式会社		
事業所名	SOMPOケア そんぼの家GH柏		
所在地	〒277-0005 千葉県柏市柏1007-1		
自己評価作成日	令和5年3月31日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・レクリエーションに力を入れており、スタッフが定期的に企画したものを、外部に依頼したものを定期的に開催している。 ・看取り介護を行っている。また、24時間医療機関と連携が取れる体制が整っている。 ・スタッフの残業管理が行えており、月平均10時間以内となっている。 ・未経験や経験の浅いスタッフでも、意見や意思を自由に発言できる職場環境である。
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.sompocare.com/service/home/grouphome/Z000349/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 NPO共生		
所在地	千葉県習志野市東習志野3-11-15		
訪問調査日	令和5年4月10日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>当該事業所は北柏駅より徒歩20分、閑静な住宅街に和風平屋建てで、周りの住宅と溶け込んでいる。敷地が広く散歩やイベントを行うことができ、建物全体に高級感がある。施設長は、利用者が毎日安心して、ゆっくりと過ごせるようにと、利用者の尊厳を大切にしている。広々としたリビングは、天井が高く、明るい室内で、新聞を読む人・調べものをする人・ソファで昼寝をする人、一日一日を好きなように過ごさせていることが伺える。居室は8畳の間取りで、表には漢字で書かれた木の表札があり、2部屋に1つのトイレで専用に近い仕様となっている。現場職員の貢献と、法人独自の家族への定期アンケート・職員への教育システム等により、利用者は9人家族の一員としてゆっくりとした毎日を過ごせるよう配慮されている。医療体制も整い最後の看取りまでの対応ができており、終の棲家として信頼されている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	企業理念について、研修を通して全職員に周知している。 折に触れて理念について意識を共有している。	職員は入所前に10日間、集中してコンプライアンスと介護ケアについての、企業研修を受けている。施設長・ユニットリーダーはOJTを兼ねて、心構えや実務のアドバイスを、適時個別に行っている。職員のネームプレートの裏には、理念がまとめられた「できますか？10」のカードを常時携帯して、いつでも振り返りを行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町会に参加し、地域の行事や暮らしにつながりを作っている。今後は子ども食堂の開催を企画している。	町内会では、利用者が地域クリーンデーに参加したり、お菓子を差し入れしてもらったりしている。比較的広い玄関前は、近隣住民の避難場所に活用してもらうよう、申し合せを行っている。今後さらに近隣との交流を深める為、敷地内で子供食堂を開催する計画をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	子ども食堂の開催を企画している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルスの影響でリアル開催での運営推進会議は行えていないが、ホームの状況報告は随時行っている。家族様の意見やご要望をお伺いし、入居者様の生活の向上やサービスの向上を目指している。	運営推進会議は、現在2か月ごとの書面開催となっている。施設長は、会議の主人公が利用者自身であるとし、積極的に参加してもらっている。内容は、入居者状況・ヒヤリハット対策・家族アンケート・運営状況等についてで、職員とはカンファレンス等で情報共有している。	現在の参加者は、利用者・家族・町会代表者のみとなっているが、欠席となっている地域包括新センターや行政(市の関係職員)にも再び参加してもらえるよう促すことが望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	柏市法人指導課と連絡を取り合い、困ったことは相談させて頂いている。	柏市法人指導課とは、日頃から困りごと等の相談で連携することが多い。市が準備した、感染対策グッズのアルコール消毒液や抗原検査キットも支給してもらっている。	運営推進会議の議事録を、郵送ではなく直接窓口を持参するなど、日頃からより密接に連携していけることが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に研修内容に「身体拘束防止」の内容があり、研修を通じて学んでいる。 また、身体拘束廃止委員会を定期的に開催している。	3か月ごとの身体拘束廃止委員会の開催に加え、iPadを使ったビデオ研修も適時行っている。転倒防止のためのセンサーマットは、家族からの要望に基づき取り付けている。利用者が不用意に立った時の声がけは、「あ、どちらに行かれますか」と問うなど、職員がそれぞれスピーチロックにならない言い換えを習得し、蓄積している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に研修で「虐待」と「虐待防止」について学んでいる。虐待を見逃さない為の「通報窓口」が本部に設置されており、職員全員が常に通報窓口の連絡先を携帯している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	行えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的に、本部からアンケートがお客様(家族)に送られており、意見や要望を伺う機会が設けられている。 返信が管理者宛に届き、ファイリングして誰もが確認できる。	本社から家族へ、定期的に「ご意見・ご要望アンケート」が郵送され、内容は施設長に回覧されてくる。その内容は、毎月のカンファレンスで職員間で情報共有がされ、日々起きている課題を記録した「苦情相談ケース」のファイルも、事務所でいつでも閲覧できるようになっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	行えている。	年一回の個別面談に加え、毎月のカンファレンスでは、個々の利用者状況の意見交換や、夜間巡視の頻度、シフトの調整などの意見が出ている。施設長は、毎月一回は全職員と個別に話し合うよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	行えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	「事業所内ケア研修」として、定期的に職員研修がWebで受ける仕組みが社内にある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	行っていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	行えている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居当初は家族様とこまめに連絡を取り合い、本人様のお困りごとだけでなく、家族様に寄り添った対応を心がけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	行えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	行えている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	行えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行えている。面会受付、手紙の代理投函、電話取次を行っている。	利用者の誕生日には、ホールケーキを買ってきて、ユニット毎に年9回お祝いしている。訪問理美容サービスは、二か月毎に利用している。入居時には、かならず馴染みの家具や自宅で使っていた寝具・枕を持ち込んでもらっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	行えている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご逝去での退去が多いため、その後の連絡はしていないが、同グループ内での転居については後フォローも行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活歴などと一緒にケアプランに本人様の思いや意向を記載、それに基づいてプランにも反映し、検討を繰り返している。	先ず、本人が何をしたいのかの希望を聞き取り、ケアプランの目標に加えている。例えば、立つことが難しい人がトイレに行きたいのをどう支援できるか、マッサージ師等から意見を聞いて介助の方法を探っていく。意思表示が困難な人の思いを理解する上で、本人の生活歴を把握し「以前はこうであった、昔好きだったこと」の中から想像して、「これでどうですか?」といった問い掛けをして確認することもある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	極力行っている。家族様の都合で遠方から来られた場合など、難しいこともあるが生活歴は大切にしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	行えている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カスタムメイドケアを目指し、個別のプランを立案し、実践している。	SOMPOケアグループで取り組んでいるカスタムメイドケアの会議から、PDCAサイクルを使った利用者一人ひとりのケアプランを考えている。個々人のケアプランをPDCAで回しながら、毎月のモニタリングを見てユニットリーダーが中心となったミーティングでケアプラン作成に取り組んでいる。必要であれば、主治医の意見を仰ぐこともある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録システムが未だ紙ベースなので共有は難しいが実践している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	提供できるサービス(外部も含む)を常に模索しているがなかなか困難がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	改善中。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	行えている。	整形外科・眼科を利用している人は基本的に家族にお願いしている。家族の都合がつかない場合は、施設が契約している訪問看護に付き添いを依頼している。以前は、入居前からの内科のかかりつけ医が往診に来れる場合はそのままお願いしていたが、現在は提携医による月2回の訪問診療・2週間に1回の訪問歯科で健康管理が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師はいない施設となるが、必要に応じて訪問看護を依頼している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	行えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・終末期においては早い段階から主治医と共有し、家族様、関係者を交えてどのように最期を迎えるかの話し合いを慎重に、定期的に行っている。	入居時に「看取り(終末期対策)に関する指針」を説明している。今年度は、看取りが1件あった。重度化の利用者が出てくると訪問看護師と相談の上、家族・職員の前で主治医から状況説明(ムンテラ)が行われ、看取りの準備が始まる。看取りに関するマニュアル・心構えに関する資料があり、重度化の傾向が見られる時点で研修の一環として取り込み、職員が理解できるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	コロナ禍のため消防署の協力を頂く訓練は行っていないが、研修を通して急変や感染症対応について学ぶ機会を設けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対策については、本部主体でマニュアルの用意がある。	地震を含めた災害対策として9月に実施、火災に関する避難訓練は8月と1月に行われ、一次避難場所を外の駐車場に決め利用者全員が参加した。災害訓練は、本部作成のマニュアルに沿って実施している。近隣との関係では、災害発生時の避難場所として当施設の提供を町会長に申し出ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人間尊重の理念の元、人格やその方を尊重し、接遇も重視している。	人生の先輩に対する尊敬の念を持つように、常に意識している。相手を敬う意味からも、スピーチロックのような上から目線の話し方、同等の接し方からの「タメ語」は使わないようにしている。また相手の意思を尊重する上でも、本人の自己決定を優先している。例えば、家に帰ってしまった利用者を家族が連れて行きます、と連絡が入った時も、「無理強いせずに先ず本人が施設に戻るという気持ちになってから連れてきてください」、とお願いしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定は大切にしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	行えている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	アクティビティとしてネイルなども取り入れている。お好みのお洋服やおしゃれも、昔からお好きだったおしゃれを楽しんでいただける支援を心がけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一部行えている。準備については、衛生上の問題から職員のみが行っている。片づけは、お手伝いいただける方にはご協力頂いている。	食事の後片付け時に積極的に「何かやることがある？」と申し出る人が多く、後片付けをルーティンとして捉えて「おり」、そこに自分の存在価値を見出しているようである。ある人は、本人の希望で朝ごはんに1品加え果物を添えている例もあり、自分なりの食事時間を満喫している。現在、たまに食事メニューを変えて、ハンバーガーを取り入れることも検討している。各ユニットでは一人一人に誕生会が開かれ、ケーキが出されている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	行えている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科にも協力していただきながら行えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個人の能力に合わせ、トイレでの排泄を心掛けている。	排便はトイレの方がスッキリするため、なるべくトイレでの排泄を支援している。人によってパターンが異なるため、訪問看護師からの助言を参考に、対応することもある。当施設の特徴の一つとして、排尿に問題のある利用者に対し、「ブラダースキャン」を使って「排尿チャート」を3日分データ化したものを分析し、排尿障害・畜尿障害のチェックを行って健康管理に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	行えている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	無理のない入浴へのお誘いは心がけているが、業務や人員不足のために思ったような支援が難しいこともある。	入浴スケジュールを決めているが、お風呂に入りたくないという人が多く、スケジュール調整しながら入浴を促すようにしている。入浴を促す手段の一つとして、「入浴後においしいお菓子を用意しておきますからね」と声を掛けたり、入浴後にポカリスエットを差し出して飲んでもらう工夫もしている。安全面では、浴室にバスタブエアを用意して、入浴しやすいようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	行えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬が変更になるタイミングで、様子の変化・特に副作用の出現については気を配るよう指示。様子の変化を記録に残すようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	行えている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルス蔓延の影響で行えていない。	職員がゴミ捨て時に、利用者を誘いだして近所を散歩してきたりしている。外出は家族と一緒にあれば許可しており、お墓参りや施設の周辺を家族と散歩するケースはよく見かけられる。コロナ前は、近隣のSOMPOケアの施設が合同でバスを借り切り、花見に出掛けていた。コロナが落ち着いたら、大洗水族館までのドライブを計画している。多くの人に外出する「ワクワクパニック」(行く前のワクワク、行っている時の楽しみ、帰って来た時の思い出)を味わってもらおうと計画している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員による金銭の使用援助は禁止されている。 ※声掛けは行えるが、財布から代わりに支払うなどは禁止されている。本人様より要望があった場合も同様である。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙や便箋の代理購入、代理投函、電話の取次ぎを行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	行えている。	どのユニットも、天井が高く、リビング全体が明るく陽当たりが良い、共有空間となっている。天井からは提灯型の照明が吊り下げられ、和風で統一された落ち着いたあるリビングで、各自が自由気ままに過ごしている。新聞を読んでいる人、難しい計算問題を解いている人、居眠りをしている人等の姿が見られるのも自然な形の生活の一場面となっている。好きな人たち同士が風船バレーをしたり、カラオケを楽しんだりそれぞれが好きなように過ごしているのもその一例である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	行えている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	行えている。	隣の居室と共同でトイレが利用できる造りの居室となっていて、利用者も自由にトイレに行ける点は当施設の特徴の一つといえる。部屋の前には木製の表札が掛けられていて施設という感じを与えない、正に自分の部屋と感ずるようにならされている。入居に当たって、昔からの馴染みの物を持ち込んでもらい、室内での親近感を醸し出し、落ち着いて暮らせるように努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	行えている。		